

ことばのいのち

——樺太アイヌ語の場合——

村崎 恭子

ことばの命とはなんだろう。それはその言語を使う人の命と同じものだろうか。ある言語の最後の話者が絶えたときその言語もなくなってしまうのか。

この問いは、1992年に私が北大から横浜国大に赴任して以来、2002年3月に定年を迎えるまでの10年間ずっと私の脳裏から離れなかった。それは、この10年の間に樺太アイヌ語の最後の話者であった浅井タケさんが亡くなったこと、待望の「アイヌ文化振興法（アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律の略）」が100年ぶりに制定されたこと、私が大学でアイヌ言語文化教育にかかわる授業を担当するようになったことなどの出来事が次々に起きたからである。

今、定年を迎えるにあたって、私がこれまでたどってきた道を振り返って、私自身の命が続くかぎりこの問いに対する答えを探るために、この文を綴りたいと思う。

アイヌ語という言語

アイヌ語は、日本列島にしかない日本語以外の唯一の土着言語である。今かりに大和民族のことばを日本語と呼ぶならば、アイヌ語は日本語がこの日本列島に話される以前に列島北部に話されていた先住民族の言語で、日本語の基盤を成す重要な言語であるということが出来る。アイヌ語は大きく北海道方言、樺太方言、千島方言の3つの方言に分けられる。このうち私がここで扱うのは樺太方言である。これを樺太アイヌ語と呼ぶことにする。

樺太アイヌ語というのは、かつてはサハリン島の南部、つまり日本植民地であった南樺太で話されていたが、戦前から戦後に及ぶ日本政府による強力な日本語同化政策によって話者が減少し、1994年に最後の話者が亡くなって絶えてしまった。樺太アイヌ語は北海道アイヌ語とかなり異なっており、普通の話し言葉では互いに理解できないほど距離がある。東京弁と鹿児島弁ぐらいだろうか。

私はこの言語の研究に、これまで40年あまり携わっている。そして今、樺太アイヌ語が話されていた南サハリンから遠く離れたポーランドに私はやってきてこの原稿を書いている。日本語科のある東ヨーロッパの4つの大学で樺太アイヌ語を教えるためである。この40年間を振り返ってみると5つのキーワードが思い浮かぶ。それは、藤山ハルさん（1900-1974）、蠟管レコード、プロニスワフ・ピウスツキ（1866-1918）、浅井タケさん（1902-1994）、アイヌ言語文化教育の5つである。この5つのキーワードをたよりに、私のアイヌ語修行の道をたどってみることにする。

藤山ハルさん（1900-1974）のこと

私がはじめてアイヌ語を習った先生は故藤山ハルさんだった。ハルさんは戦後樺太から北海道に引揚げてきて常呂に住んでいた。樺太西海岸のライチシカ方言の完璧な話者だった。ハルさんにはじめて会ったのは1960年のことであったからハルさんが60歳のころである。それより5年前に、服部二郎先生が「アイヌ語基礎語彙調査」で北海道へ行かれたときに発見されたというこの人を、先生に紹介されて私のアイヌ語修行が始まった。ハルさんが健在だった常呂時代には、60歳以上の年長者層の間ではアイヌ語が生きていたと言っていい。私などがハルさんにアイヌ語で話してくれと頼むと、すぐ話し相手が寄ってきて、アイヌ語で自由に話してくれた。つまり、話者が複数いたから会話が成立したのだ。このことは実に貴重な状況で、この時代にはとにかく、ライチシカ方言の口語テキストをできるだけ多く収集することに努力した。

とはいっても、常呂にはアイヌ語が自由に話せるのは、実はハルさんとマオカ方言の太田ユクさん（1894-1980）の二人しかいない。何とかしてもっと話者を探して一緒に会話をしてもらいたいと、常呂に遊びにくる樺太アイヌの人々の伝をたどった結果、知床半島のウトロに長嵐イソさん（1882-1964）を探し当てることができた。



常呂の浜辺でお団子を食べるハルさん（右）とユクさん（左）。1961.8

米村アチャボと知床へ

でも、訪ね当てたイソさんは、当時すでに80歳を超えた高齢で、しかも盲目でとても常呂に連れてくることなど不可能だった。それで、何とかして常呂の

二人を知床へ連れていって、3人で会話をしてもらおうと、方々手を尽くしてその手段を求めたところ、網走郷土博物館の米村喜男衛館長のお世話で、ハルさんとユクさんと私、それに米村館長と更科源蔵氏（詩人）と5人で知床へ行くことが実現した。

戦後樺太から引揚げてきたアイヌ、オロッコ、ギリヤークの人々のお世話を一手に引き受けて、いつも「やあやあ」と手を挙げて常呂を訪れる米村さんは、みんなに「米村アチャポ〔アチャポはおじさんの意味〕」と呼ばれて親しまれていた。その米村アチャポに連れられて一行は、1962年夏のある晴れた日に、当時まだ走っていたかわいい汽車の湧網線に乗って網走まで行き、それから汽車とバスを乗り継いでウトロまで行ったのであった。ハルさんとユクさんはよそ行きの着物を着て、トンコリを包んだ風呂敷包みを持って、アイヌ語と日本語でお喋りをしながら道中楽しく行ったのを今でもありありと思い出す。

イソさんは、東海岸のタライカの出身で、白内障のために目は見えないが、記憶の確かな、これまたすばらしいタライカ方言の話者であった。タライカ方言は東海岸ではあるが東南の白浜やトンナイチ（富内）の言葉とはかなり違う。でも西海岸のライチシカ方言とはそんなに違和感がないようだ。この人にはじめて会った二人はすぐ三人でアイヌ語でお喋りをはじめた。このときの録音は樺太アイヌ語の生きた会話の音声資料としては貴重な最後のものとなってしまった。

モヨロ貝塚の発見で知られる米村さんのもう一つの偉大な功績は、網走周辺に住む樺太からの外来者に公私にわたる支援を惜しまなかったことである。お



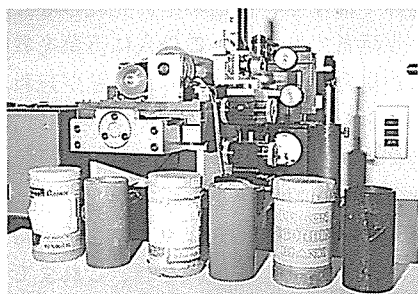
知床の浜辺で会った3人、左からハルさん、イソさん、ユクさん。1962.8

かげで私も常呂に毎夏調査に行ったとき、ギリヤークの中村チヨさんをはじめ多くの方々と親しく接することができた。

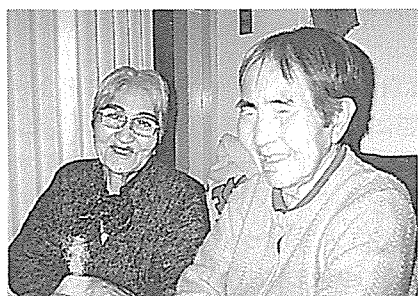
さて、この樺太アイヌ語黄金時代も、1974年にハルさんが亡くなったときに終わりをつげた。シャーマンでもありアイヌ語会話の中心であったハルさんがいなくなると、年長者間でのアイヌ語会話もまったく聞けなくなって、アイヌ語の灯火が消えたかに思えた。

ピウスツキ蠅管と浅井タケさん（1902-1994）

その後、9年のブランクが続いた。しかしこのブランクは、B. ピウスツキが録音した蠅管レコードの発見と再生によって見事に破られた。



ピウスツキ蠟管とその再生装置、北大。1984.7



タケさん（右）と島村トキさん（左）、老人ホームにて。1988.7



B. ピウスツキ（1866－1918）

ポーランド独立の夢を目指して、当時のロシア皇帝の暗殺を企てて、それが事前に発覚して、サハリンに流刑されたB. ピウスツキは、北サハリンでの刑役義務を終えたあと南樺太に移り、アイヌ語の口承資料の収集に着手した。その資料の一部、1903年ごろに録音されたと思われる蠟管レコードが、ポーランドのザコパネで発見され、日本とポーランドの共同研究によって62本が再生された。それは1983年、つまり私が東京外語大から北大に転動した年の出来事であった。

80年もの間度重なる戦禍の下で眠っていたアイヌ語の音声がよくがえったこの蠟管レコードのおかげで、私はもう一人のすばらしいアイヌ語の先生に巡り会うことができた。故浅井タケさんである。

タケさんには1983年の暮れ、この再生された録音テープを聞いてもらうために、NHKの取材班とともに全道を樺太アイヌの古老を訪ねたときに巡り会った。私の第2のアイヌ語の先生である。この人も西海岸のオタフ出身で18歳のとき少し北のライチシカに移って引揚げまでいたというから、ハルさんと同じライチシカ方言の話者であった。ハルさんに勝るとも劣らない完璧な話者だが、生

後まもなく失明したため外界の事物を、視界ではなく、自己の中に完成させた聴覚による世界によって把握しているという話者であった。この人に言葉を教えてもらう過程でしばしば、タケさんが目が見えないことをすっかり私が忘れることがあった。盲目であるが故にか、この並外れた記憶力の持ち主から私は、1994年に亡くなるまでの9年間に、トウイタハ（昔話）やウチャシクマ（民話）やオイナ（神謡）など膨大なアイヌ語口承資料を収集することができた。

一方、ピウスツキ峠を巡っては、ポーランドの言語学者A.マイエヴィチ博士によって「B.ピウスツキ資料国際研究組織、ICRAP」が組織され、これまで3回の国際学会が開催された。第1回は1985年札幌、第2回は1991年ユジノサハリンスク、第3回は1999年クラクフで開かれた。

いざサハリンへ

その後、ICRAP国際会議と平行して、私自身も奇跡的なタケさんとの出会いによって大いに自信を得て、1989年に大胆にもサハリン調査旅行を計画した。幸い文部省の科学研究費が支給され、「サハリンにおける少数民族の言語に関する調査研究——樺太アイヌ語・ニヴフ語・ウィルタ語」（1990-1992）というプロジェクトが実現した。これは樺太がソ連領になってから日本初のサハリンへの学術調査で、1990年の夏、内外の研究者10人の調査団を組織して、私は憧れのサハリンへ行った。

どこかにアイヌ語が出来る人があるかもしれないというひそかな期待を持って、タケさんの故郷を巡って、またあらゆる筋をたどって捜し求めたが、駄目であった。同じサハリンの少数民族であるニヴフやウィルタの人々は少数ながらちゃんと言語を保っているのに、アイヌ語が出来る人には一人も出会うことが出来なかった。昔栄えたアイヌコタンのあったところには風光明媚な海と川と湖の自然があるのみであった。この旅は私にとって、どうしてアイヌ語だけがこんな風に根こそぎ日本語に同化される運命になってしまったのかを改めて考え

させられる非常に重い経験であった。それでも、樺太アイヌの人々からいつも聞いていたその故郷の美しい自然の中に立って、私は樺太アイヌ文化を実感することが出来た。

アイヌ語に関しては空しい結果であったが、この1990年のサハリン調査をきっかけにして、その後北方少数民族の言語調査研究を中心に研究者の国際的、学



サハリンのタライカ湖を背景にした筆者。1990.7

際的ネットワークの輪が広がって、現在、文部科学省の特定領域研究で1億円を超える研究費と、600人以上のメンバーによる大規模なプロジェクト(1998-2002)「環太平洋の消滅の危機に瀕する緊急言語調査研究」が、宮岡伯人研究代表者(大阪学院大学教授)のもとに進行中である。

私の研究プロジェクトに関しては、サハリン調査のあと、世界的に著名なニヴフ語学者、R. アウステリッツ博士と、ニヴフ族出身の言語学者ガリーナ・オタイナ女史を北大に招聘することが出来て、タケさんを訪れて、門別の浜辺でそれぞれ子守唄を歌いあったのは貴重な経験であった。また最初のサハリン調査以来、オランダのグロニンゲン大学のT. デ・グラーフ博士とは、いつも最良のコリグとしてずっと互いに交流している。

しかし、高齢だったタケさんも、ついに1994年に92歳で亡くなった。悲しいことに、その直後にR. アウステリッツ博士が、次の年には服部四郎先生とG. オタイナ博士が次々に亡くなった。

樺太アイヌ語の行方

いよいよこれで樺太アイヌ語の土着話者は絶えた。これはこの言語の消失を意味するのだろうか。いや決してそうではない。日本では金田一京助、知里真志保、服部四郎、外国ではB. ピウスツキ、ドブロトヴォルスキ、J. バチラーらの資料の中に、そして私がハルさん、ユクさん、イソさん、タケさんから集めた音声資料の中に、この言語は今も眠っている。これらの資料を、ようやく1997年に施行された「アイヌ文化振興法(略)」によって、少しずつアイヌ言語文化学習の機運の高まった中で、習いたい人があれば習えるように整理し、世界に公開することが、われわれ研究者に課された任務ではないだろうか。そうすれば、この眠っている言語が目覚めて、いつの日か世界のどこかで、少しでも、受け継がれていくに違いない。



朝鮮系ニヴフ女性を囲んで、R. アウステリッツ博士(左)とR. ラムジー博士。1990.7



サハリンボロナISKで郷土料理を楽しむT. デグラーフ博士(左)とR. ラムジー博士。1990.7

そうは思っても、現実には、もう世界のどこでも話されることなく、地元の日本でさえ、その存在すら無視されつづけている「ことばの研究」に携わることは、なんとも空しく孤独な仕事である。

いくら私が折あるごとにアイヌ語を教えても、それが使えるコミュニティがないのだからつまらない。こんな絶望の中にわずかな期待を秘めて、私は定年最後の年である21世紀の初年を迎えたのであった。

アイヌ言語文化教育の可能性

私はこれまで、ずっと30年ほど東京外大、北大、横浜国大と3つの国立大学で教職についてきた。私の担当は当初から留学生に対する日本語教育や教授法などの日本語関連科目ばかりであった。ところが、どういうわけかこの近年、私はアイヌ言語文化に関する科目を担当する機会を多く与えられている。学内では1998年度から毎年、一般教養科目として「アイヌの言語と文化」を、学外では今年だけ同じ科目を北大と東京女子大で開講した。本業の日本語教育の傍ら、アイヌ語教育に携わることは定年を間近に控えた老齢の身には非常に骨の折れ



蜚管が見つかった家、ポーランドのザコパネ。
1999.10



ポーランドのポズナニAM大学の受講生たち。
2001.10

る仕事であるが、私が今これを伝えなければ一つの言語がこの世から永久に姿を消して、わからなくなってしまうと思うと不思議な力が出てきて、なんとか前期の授業を無事に終了することが出来た。

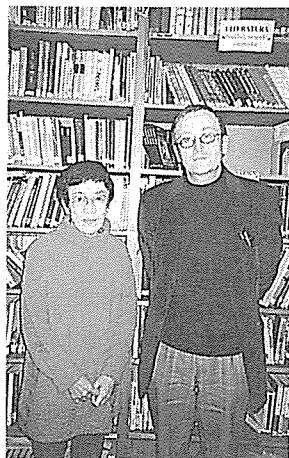
そしてうれしいことに2001年の10月から年末まで東ヨーロッパに滞在して、ポーランドのポズナニ大学（正式名はアダム・ミツキエヴィチ大学）、ワルシャワ大学、クラクフ大学、そしてスロベニアのリュブリアナ大学で「樺太アイヌ語特別講義」を開講することになった。アイヌ言語文化学を日本地域研究の中に位置付けるために、まずB. ピウスツキゆかりの東ヨーロッパの日本学研究科のある大学でアイヌ語を教えたいという私の願いを、それぞれの大学で日本語科の主任として、日本学研究の学徒を育成されているA. マイエヴィチ教授、R. フシチャ教授、M. メラノヴィチ教授、A. ベケシュ教授が

聞き入れてくださって、「国際交流基金2001年度日本研究客員教授派遣プログラム」の助成を得て、これが実現したのである。

4週間のポズナニでの授業を終えて、今ワルシャワ大学の授業が始まったところだが、すでにこの世から姿を消したことが、今後、たとえ一人でも一言でも伝承されていけば、ことばの命は決して絶えることはない、私は今確信している。これから先どんな道が開けるのか、皆目見当もつかないが、ポズナニで早速、修士論文のテーマにアイヌを考えたいという学生が2人出てきた。また、ポズナニの街の地下道ですれ違った若者に「イランカラハター」とアイヌ語で声をかけられた時は本当にうれしかった。私は言語学が専門だから、この講義では、言語習得を第一の目的にしたが、その背景にかかわる歴史や文化についても、ビデオを見せて適宜紹介した。その結果、アイヌの音楽や服飾に興味を持った学生もいて、近くアイヌ民族歌舞団をポズナニのマルタ民族祭に招待する計画が浮上した。

折から11月11日はポーランド共和国独立記念日で、ワルシャワでは古式豊かな装束をまとった騎兵のパレードなどが行われていた。ピウスツキ兄弟の弟ユゼフは建国の英雄としてつとに有名だが、1918年のこの日を待たずにパリで謎の死をとげた、兄のプロニスワフの方は、このポーランドでもその存在すらあまり知られていない。

21世紀は、日本、アイヌ語、サハリン、B. ピウスツキ、ポーランド、そして東欧を巡る絆がより強く、確かなものになるように、願ってやまない。



ワルシャワ大学日本学研究室でR. フシチャ先生と筆者。2001.11



ポーランドクラクフのヤギエヴォ大学の受講生たち。2001.11

(2001年11月ワルシャワにて)